

5 和紙はふるさと



増田 勝彦
MASUDA Katsuhiko

和紙文化研究会 / 副会長

和紙は日本の風土にそって独自の展開をしてきている。日本に紙造りの技術が伝わってから今に至るまでを振り返りつつ、和紙の使われ方や特徴・性質、洋紙との違いなどを紹介して、和紙へのこだわり、和紙のよさを伝える。

和紙の現在

一般名詞としての“和紙”とは、江戸時代まで造られていた紙と同じ原料、楮、三桮、雁皮を使用して手作業によって造られた紙を指します。しかし、店に並べられている和紙は、木材パルプを含む多種の繊維を利用して機械で抄造され、模様付けも機械的に行われているものが大半です。いずれも和紙の風合いを示して、これぞ和紙ですという姿をしています。

いわゆる和紙らしい和紙とは、楮を原料として紙表面に繊維による微少な凹凸がある手漉き紙と、その表情や風合いを持つ紙を指していると思われる。

なかでも、典型的な和紙らしさが表現されている



写真1 雲竜紙

るのは、解しが不十分な繊維の束が浮遊している紙です。雲竜紙（写真1）、大典紙、大札紙と呼ばれる一連の紙は、大正時代末期に福井で開発された新銘柄です。明治時代になって、白無地の手漉き紙の需要は機械製紙に押されたため、手作業でこそ可能な装飾や加飾紙の開発へと産地の努力が向けられた成果でしょう。紙漉きの過程で行われるこの種の装飾は日本で独自に発展した技法です。日本以外での装飾技法は、ほとんどが出来上がった紙に対して施されているのです。日本の多様な装飾技法は世界中のどの国の手漉き紙にも見ることが出来ません。

その中で維持されてきているのは、和紙の持つ風情でしょうか、現代の和紙は日本のふるさとを代表するものだと思います。そんな和紙が辿ってきた道を振り返って見ましょう。

和紙を振り返る

中国の前漢時代に紙が発明された当初、紙は包装紙として使われたようです¹⁾。それから数百年後に日本に紙が伝わったのは、仏教教典や外交文書などの書写材としてでした。以来、文書や教典のための料紙を造っていたと思われます。

教典料紙は中国から伝わった伝統を強く意識した造り方です。日本に残る中国や日本で書写された教典料紙を観察すると、私たちがイメージする和紙とはかなり隔たりがあります。

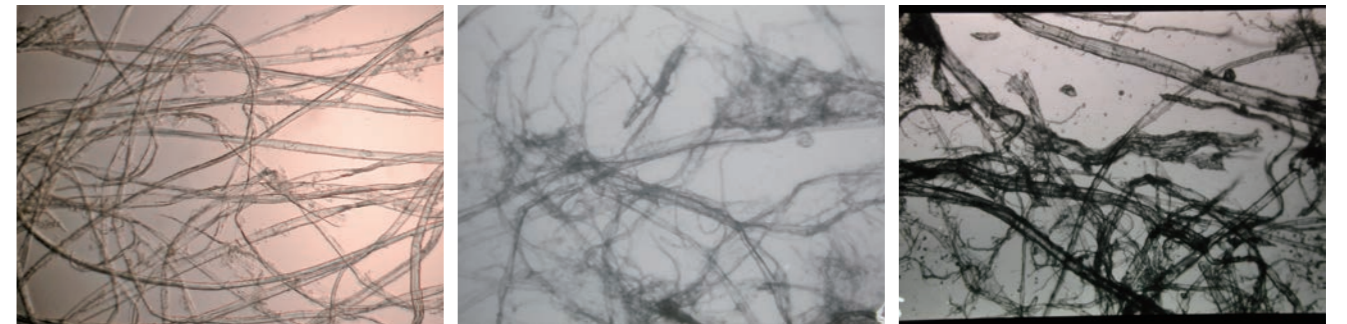


写真2 紙繊維の比較。江戸時代往來物（左）、8世紀の經典料紙（中）、18世紀のイタリア手漉き紙（右）



写真3 『大般若經第五百四十七卷』奈良時代（©王子・紙の博物館）

まず、紙が堅くて表面が平滑です。顕微鏡で覗くと、繊維は短く切断され、衝撃によって毛のように解されています。その状態は18世紀の手漉き洋紙とよく似ていました（写真2）。繊維調製も今の手漉き和紙とは大違いで、長い繊維をわざわざ細かく切断し、強く叩いて解しています。さらに、乾燥した紙を打ち締めて、表面の平滑性と紙自身の緊密さを高めています（写真3）。金銀で書写した場合は瑩という磨き作業さえ加えられます²⁾。国の統治機構が整備されるにつれ、事務や連絡手段としての紙が重宝され、紙を造る技術も広く普及するようになりました。

正倉院に保存されている8世紀を中心とした多数の文書の中には、戸籍を報告した文書が多くあります。戸籍は地元で一部、提出用に二部が最低でも用意されなくてはなりません。中央が戸籍記述用紙を配布したとは考えにくいので、戸籍を提出した土地で造られた紙が使われているとしてよいでしょう。役目を終えた紙の裏面が、内部業務用文書として利用されたものが現在残っています。正式な文書の裏面を利用するほど、紙はまだ貴重なものでした。

紙はもっぱら書写用途だったわけで、他の用途

に紙が使われたとは思われません。包装紙や拭い紙など書写以外の用途に紙が使われたのは、紙漉き技術が広く一般的になってからでしょう。

豊富に出回り利用法も多様に

それでは紙漉き紙が入手し易くなったのはいつ頃でしょうか。

その実例を平安時代の遺品に見る事が出来ます。平安時代には懐紙（和歌が書かれた熊野懐紙が有名）という紙も出てきますし、紙で服を仕立てる紙衣（二月堂お水取りの練行衆が着る）など、書写以外の用途に使われている例があります³⁾（写真4）。

また、同時代の絵巻物に『餓鬼草紙』がありますが、その一場面では、道で排便をしている付近に紙が散らばっている様子が描かれていて、既に紙は単なる拭い紙としても使われていたことが分かります（写真5）。

さらに、我々が障子と呼ぶ明障子は平安時代末期の文献に現れ、障子紙は現在のものと同程度の薄さの和紙が使われていたことが想像できます。例えば、平清盛の外孫にあたる東宮、後の安徳天皇が満一歳になって屋敷を訪れたときに、清盛に教えられるまま指につばをつけて明障子に穴をあけたことが『山槐記』に記されています⁴⁾。童子の指で穴が開く程度の紙の厚さは、今と同じと考えてもよいでしょう。障子という建具と一緒に障子紙は現代まで伝えられているのです。

江戸時代には、全国に紙漉きが広まった結果、教科書としての往來物、読み物としての草双紙や合巻本などの大衆向け書籍出版も盛んになり（写真6）、日用品では紙衣の他に、襖、扇子、団扇、番傘など建具や生活全般に紙が利用されました。



写真4 紙衣(夜着) ©王子・紙の博物館



写真5 「餓鬼草紙巻断簡」より(東京国立博物館所蔵)



写真6 「根みむらさき」笠亭仙果作、歌川国貞画、喜鶴堂板

これらの品々が明治以降も途絶えることなく、伝統的工芸品として現代まで受け継がれているのは、日本として自慢できることではないでしょうか。

和紙は丈夫

和紙は丈夫で1,000年持つと言われていますが、正倉院に保存されている文書はすでに1,300年を経過しています。調査で直接取り扱いましたが、特に傷みが進んでいるとは思えないほど良好な状態でした⁵⁾。保管方法は、高床木造瓦葺の倉中に置かれていた木製唐櫃に収められていただけでした。戦乱による炎上略奪などの危険が大いにあった環境です。雨風に当たっていないだけで、気象変化の影響を受ける環境で1,300年良好な状態を保っていること自体を考えると、確かに和紙は1,000年経っても丈夫だと言えます。

江戸時代の大福帳には長い細縄が括られていた

のですが、その縄は火災に際して井戸に投げ込んだ大福帳を引き上げるためのものだったといわれます。井戸の中で火災から生き残った大福帳は墨の滲みもなく、そのまま使う事が出来たというわけです。和紙はこのように丈夫と言え丈夫ですが、濡れた状態が続けば黴は生えるし虫には食われてしまいます。

一体に植物の靱皮繊維で出来た物は、年を経ても丈夫です。私たちが目にする傷みの早い紙は、工業的に製造された木材パルプを原料として酸性薬品が加えられた、いわゆる酸性紙が主体なのです。

和紙と洋紙の違い

和紙と洋紙の違いを比較するには精密な計測器を備えた試験室が必要ですが、ざっとした比較であれば、本の体積あたりの重さ、つまり嵩密度 (g/cm³) で比較するのが便利だし、実感しやすいでしょう。

手持ちの資料の中から、和紙本、手漉き洋紙本、洋紙本を4冊ずつ計量して、平均嵩密度を算出しました。結果は和紙本0.35、手漉き洋紙本0.57、洋紙本0.7でした(写真7)。和紙として売られている紙は、手漉き、機械漉き共に軽いですし、ヨーロッパの古い書物が手漉き紙の場合は、洋紙の新しい書物に比べて軽い。イタリアの古書店で本を棚から取り出した瞬間、その本の軽さで手漉き紙に印刷されたものだと実感しました。

和紙の軽さはどこから来ているかというと、長い繊維が比較的緩く絡み合っていて紙層を形成しているからです。典型的な和紙は原料である楮の平均



写真7 嵩密度の比較。和紙本(左)、手漉き洋紙本(中)、洋紙本(右)

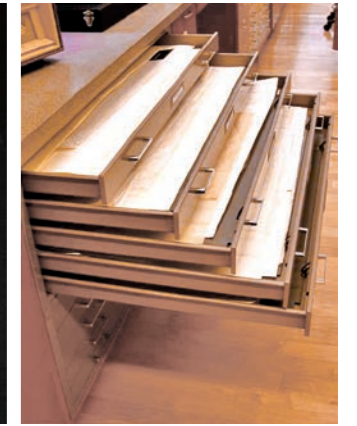


写真8 美術館修復部門の引き出しにストックされている和紙

10mmもある長い繊維が絡み合っているのに対して、洋紙は原料である木材パルプ繊維(広葉樹で1mm、針葉樹で3mm程度)が緻密に重なった構造をしています。

和紙の性質由来する洋紙との違いを実感する機会として、歴史文献の補修処置があります。ヨーロッパの歴史的文獻などの堅い紙を補修するには、堅い洋紙ではなく、柔軟な和紙こそ適しています。緩い構造の和紙は堅い紙に良く馴染み、繊維間に接着剤などを含まないので多様な接着剤の使用が可能です。ですから、欧米の美術館博物館図書館などの保存処置部門には必ず、数種類の和紙がストックされているのです(写真8)。

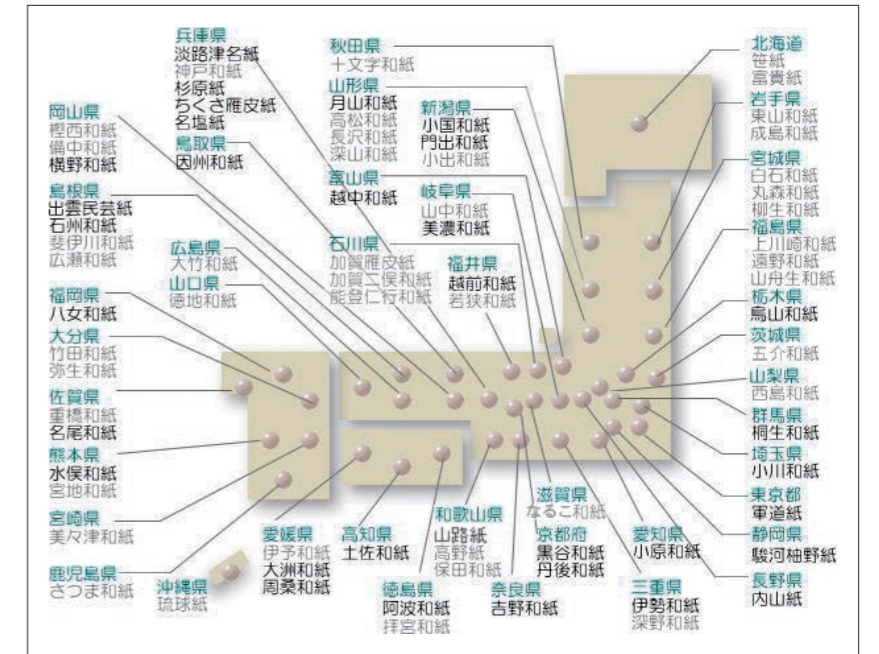


図1 手漉き和紙産地マップ(全国手すき和紙連合会HPより)

手漉き和紙工房が多い日本

欧米諸国に工業紙が導入される前には、それぞれの国に手漉き紙工房が多くありました。しかし、イギリス、ドイツ、イタリアなど、現在生業としての手漉き紙工房は各国とも片手で算えられる位の数に過ぎません。

それに対して、世界的な工業国として知られている日本には、多くの伝統工芸と共に手漉き和紙工房も多く活動しています。現在、手漉き和紙の全国組織の会員数は40の産地組合や個別組織を算えます。組織に属さない工房等も含めると75産地、100軒を超える工房が手漉き和紙を漉いています

し、機械で和紙を造る工房を加えればさらに多くなります(図1)。これは、世界に誇ってよいことだと私は強く思います。

なぜ、日本人はこれほどまで和紙にこだわり続けるのでしょうか。私は歴史と風土に育まれてきた和紙の風情に対する共通の親近感があるからだだと思います。和紙はふるさとなのです。

<参考資料>

- 1) 『中国製紙技術史』潘吉星著、佐藤武敏訳、平凡社、1980.11.20 p46
- 2) 大川昭典・増田勝彦『製紙に関する古代技術の研究1.2』保存科学23.24、東京国立文化財研究所、1981、1982
- 3) 『和紙文化辞典』久米康生、わがみ堂
- 4) 国立国会図書館デジタルコレクション『山槐記』治承3(1179)年12月16日条、168-170コマ
- 5) 『正倉院宝物特別調査 紙(第2次)調査報告』正倉院紀要第32号、宮内庁正倉院事務所、平成22年3月